

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	当法人における在宅酸素導入症例の検討
演者名	岡村新一 1)、鶴田芳男 2)、土器潔 3)、前納崇弘 4)、福田俊一 5)、 山口高秀 5)
所属	医療法人おひさま会 1)おひさまクリニック西宮、2)おひさまクリニック湘南、3)おひさまク リニック、4)おひさまクリニック青葉台、5)やまぐちクリニック

目的：在宅医療の対象は、療養場所や疾患の多様性に加え療養の目的や希望も患者毎に異なるため、急変時に求められる介入方法も多様である。特に呼吸苦や呼吸不全を伴う場合には、急性期病院や救急医療との連携が不可欠となっている。一方で、がんや非がんの終末期患者の中には、急変時に搬送ではなく在宅酸素の導入が選択される例が少なからず存在する。今回我々は、在宅での酸素導入例を検証し、患者背景やその後の転機から在宅酸素療法のあり方を検討した。

方法：当法人内で 2013 年 6 月から 2014 年 5 月までの 1 年間に、新たに在宅酸素療法の導入を行った症例について、その患者背景やその後の転機について検討した。

結果：2013 年 6 月 1 日時点で訪問診療の対象患者は 933 例。上記期間中の看取り数は 318 例で、在宅看取りは 200 例(62.9%)であった。

新たに在宅酸素の導入を行ったのは 108 例で、年齢中央値は 85.5 歳、男性 50 例、女性 58 例、療養場所の内訳は、居宅 53 例、有料老人ホーム 41 例、特別養護老人ホーム 7 例、高齢者住宅 2 例、その他 3 例。在宅酸素の導入時期は、看護師訪問時が 32 例、医師の臨時往診時 29 例。在宅酸素導入後の転機は、死亡 82 例、病院外看取り 62 例(75.6%)。20 例は現在も訪問診療を継続中で、8 例に酸素投与が継続され、12 例は酸素投与が中止可能であった。

考察：当法人での在宅酸素療法の導入は、終末期患者や慢性呼吸不全の患者が多い傾向にあり、特に悪性腫瘍の末期患者では在宅医学管理期間と共に在宅酸素の利用期間が短い傾向にあった。全患者を対象とした在宅看取り率よりも、在宅酸素導入症例での看取り率の方が高く、終末期の患者に在宅酸素を開始する意義はある可能性が示唆された。ただ、その適応や効果判定に関しては更なる考察が必要と考えられた。